

---

# スイートポテトラブ

河 美子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

スイートポテトラブ

### 【EZコード】

N3190Y

### 【作者名】

河 美子

### 【あらすじ】

リン先生との五枚企画です。

今回は恋愛。といっても初恋。

自転車の荷台に積んでいたのは、おばあちゃんの煙で獲れたサツマイモ。

みかん箱にたくさん入れて持つて帰る途中、古いゴム紐が切れちゃった。

嫌な音とともに、切れたゴム紐が背中を打った。

「いったーー！」

まるで鞭のようにしなって私の背中を打ったものだから、痛くて自転車を止めた。

止めた途端に荷台から落ちたサツマイモ。

ゴロゴロと坂道を下る。

「あーあ、だからこのゴムで大丈夫かつて聞いたのに」

おばあちゃんたら古くとも切れはせんつて。嘘ばっかり。

その時に下からサツカーネ部が坂道のダッシュとかで走つて来た。

「わあ、イモだ」

みんなが面白がつて拾い集める。

私は恥ずかしさで死にそうよ。高校一年生の純真無垢な女子高生なのに、サツマイモをばらまくなんて。しかも一番見られたくないサツカーネ部の吉岡君に見られちゃった。

「あ、桜ちゃんのイモか」

「う、うん」

みんなは笑いながら一人で食つのかと冷やかすから、もつ涙が出そうよ。

「おばあちゃんの畑のサツマイモ」

「さうか、早く渡したら行くぞ」

吉岡君は颯爽とそう言つと、みんなのイモを回収して箱に入れてくれた。

私は半泣き半泣きになりながら受け取った。

「俺、イモ好きだぞ」

「そう」

もつと気の利いたセリフで返したいのに、べそをかいてる私はそうとしか言えなかつた。

荷台にもう一度紐をつなぎ合わせて箱を載せた。

背中は相変わらずゴムが当たつた痛さでひりひりしていた。

家に着くと、イモの箱を台所に運びドサツと置いた。

「あら、桜。そんなにドサツと置いたら、イモの土が床に撒けるわ」

「もう、イモなんか獲りに行かない！」

「何を怒つてるの」

「おばあちゃんたら古いゴム紐でじばりつけるか、途中で切れたのよ。みんなに見られたわ」

母は目をくるくるさせて箱からイモを取り出した。

「大丈夫かしら、折れなかつたかなあ」

「イモと私どもちらが大事なの！」

「あなたは大丈夫でしょ。箱が落ちたんでしょう」

「恥ずかしくて死にそうだつたわよ。同級生に見られちやつたのよ」

「あら、まあ」

そう言いながらも、母は知らん顔でイモを洗い始める。

「今日は大学イモを作るわ」

あの餡で絡めた大学イモは大好きだけど、乙女の気持ちがまるで分かつてないわ。

母は鼻歌まじりでイモを洗い出した。

「桜、洗つたら切つてちょうどいい」

「うん」

母が相手をしてくれないから仕方なく乱切りにした。

ホクホクしたサツマイモ。

おばあちゃんの作るサツマイモは天下一品。

「おばあちゃんはまだ畑なの？」

「うん、サツマイモのツルを持って帰るつて

母が油を入れて、イモを揚げる。

「そこに砂糖と計量カップに計った水があるから、鍋で煮てひょうだい。ゴマもあとで入れるから」

「はーい」

いい匂いが台所に充満する。

「ねえ、この大学イモ、拾つてくれた同級生にも届ける?」

「うんうん、いいの? お母さん」

「こんなにも家では食べられないわ」

「わーい」

母がアルミホイルで包みなさいって。

「お母さん、あの可愛いホイル使つていい?」

「いいわよ」

キャラクターの柄のホイルを取り出して、大きく広げる。

「ゴマを振りながら、吉岡君の顔を思いうかげる。」

イモが好きな女の子はどうかしら。

何だか嬉しくてニヤニヤしてると、母が覗きこむ。

「あらあら、わざわざまでふくれてたのに」

「意地悪」

でも、途端に気持ちが華やいで来るから不思議。吉岡君は私の隣の席。

いつも面白したこと言つし、スポーツもできる。お勉強は私の方が上かもしけないけど優しいところが好きなの。

この前も掃除当番の時、手に棘が刺さつていたら雑巾をさりげなく洗つて絞つてくれた。

後ろの美香ちゃんが背中をつづついてきた。

「吉岡君、桜に氣があるね」

「嘘、そんなことないわよ」

と言ひながら嬉しくて顔が赤くなっちゃつた。

アルミホイルからこぼれるサツマイモの甘い匂い。

自転車のかごに入れてグラウンドまで走る。

グラウンドでは監督が怒鳴っていた。

「吉岡、そんなことではキーパー務まらんぞー。せつめも重つただらー！」

「はー」

「ああ、なんてまづい時に来ちゃつたんだろ？。

吉岡君だけが叱られてる。

私は届けに来たという雰囲気にならなによつて、自転車で走り抜けた。

たまたまグラウンドの向こうで親戚でもいるかのよつて一周して帰つて来た。

監督の怒鳴り声を背中で聞きながら。

悲しかつた。

あつたかい差し入れをしたかつたのに。

監督のバカ野郎。

涙が頬を伝つて来た。

「ただいま」

「あら、桜。届けたんじやなかつたの」

返事もせずに二階へ駆け上がる。

でも、折角心をこめて作ったのに。

母が玄関で誰かと話してゐる。

あの声は吉岡君。

バタバタと駆け下りていく。

「さつき、来てくれたんだる？」

「えつ？」

「だつて、高台のグラウンド近くには何もなし。いい匂いもした

し。罰として監督が代表で貰つて来いつて  
あ、そつか。

監督つていい人かも。

渡すとこりこりした吉岡君。

「今度の日曜、試合があるんだ。見に来てよ

「うん」

母が台所でアリアを歌つている。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3190y/>

---

スイートポテトラブ

2011年11月17日20時59分発行